

書くことは急がないこと

今の教育は(明治以来)読み書き同時教育です。しかし、私の実験で、読み先習、書きは急がない方が、わずかの時間で早く正しく書けるようになることを証明しました。

漢字が読めて、意味もよく解り、その字を読む機会を重ねていきますと、自然にその字形が頭の中に正確に形作られていきます。そうってから書く練習をしますと、今までの練習時間の三分の一、四分の一の時間でも、今までよりも正しく美しく書けるようになります。

だから字形が頭の中に形作られていくまで、急がず待っていることです。頭の中にないものを書くのでは、一点一画にも手本と引き比べなければならず、書いたものも不正確で醜いものになるわけです。

読み書き同時学習では、練習効果が上がらず、練習が苦痛なものになるのが当然です。それに反して、読みの学習を十分にして、字形の認識が進んだ上で書く練習をすれば、わずかの時間で書く技能が向上しますので、書く学習も楽しく、いよいよ能率が向上するわけです。

だから、小学校に入学するまでは、書く練習を期待しないのがよいと

思います。幼児に漢字が書けても、それを書くことに価値を見出すことが出来ません。それよりも、読むことこそ、どんなに多く読んでも読み過ぎることがない、と言ってもよいほど価値の高いことなのですから、読む機会を多く与える努力をすべきです。

漢字力が理科や社会科にも関係する、というのは、漢字を読む力のことであって、書く力のことではありません。

ところが、どうしたことか、何よりも重要な“漢字を読む”学習を重視しないで、“漢字を書く”学習に、親も教師も力を入れています。どうも、本末を順倒しているといしか言いようがありません。